

山口逸彩人

やまぐち「これこびと」
yamaguchi isaibito

きらり輝く山口の



〔山口逸彩人〕 花火業者「鎌田煙火」代表 石丸 浩さん

「想いに報いる」が原動力

〔column〕 まりんの美味しいもの日記
Lisa's Photo Gallery

vol.02

yamaguchi isaibito
2017. SUMMER

山口逸彩人

やまぐち いさびと

「想いに報いる」が原動力

花火業者「鎌田煙火」代表 ● 石丸 浩さん



四 口県で唯一の打ち上げ花火業者「鎌田煙火」代表の石丸浩さん。鎌田煙火は明治時代の創業で、石丸さんはその四代目に当たります。一度はサラリーマンの道へと進みましたが、悩んだ末に家業を継ぎ、今ではここが自分の居場所だと言い切る石丸さんは、各地の花火大会で夜空に大輪の花を咲かせ続けています。

生きているうちは良いことを

——サラリーマンを辞めて家業を継ぐに至った経緯をお聞かせください。
石丸 小学生の頃から父の仕事をずっと手伝われて、しかも丁稚のように下働きをさせられていたので、花火師は重労働できつい仕事だという認識しかなかったし、実際に打ち上げられた花火を見る余裕ありませんでした。だから自分の中で「仕事を継ぐ」という意識は全くなかったですね。

サラリーマン時代にも休みの日には手伝っていました。自分では「こんな所で何をやってんだ。ここは自分の居場所ではない」と思っていました。

そうは思いながらも胸の中に色々な葛藤が渦巻いてきて、実は悩んだんです。曾祖父の代から続いている鎌田煙火の名前をなくすわけにはいかない、と思ったのも葛藤の原因の一つだったし、色んな迷いが生じて二ヶ月間悩みに悩んで、遂に「花火やさんになる！」と決心しました。そして妻に「会

社辞めるよ」と言ったのが32歳の時でしたね。

——その時、奥様は何と言われましたか。

石丸 「いいよ」と一言。

——反対はされなかつたんですね。

石丸 散々悩んでいた僕の姿をそばで見えていましたからね。ほっとしたんだと思いますよ。

——葛藤を乗り越えて決断した理由は。

石丸 人間は生きているうちは人のためになる良いことをしなくてはいけない、若い頃は周囲に迷惑をかけたこともあった自分ができる良いことって何だろうと考えて、自分には花火しかない、ということに気がつきました。他にも理由はたくさんありますよ。でもこれが一番大きな理由ですかね。みんなに幸せになつてもらいたい、ということは常に頭の中にあります。

自信と熱意の営業

石丸 継ぐと決めてまず実行したことは、花火を上げる現場を増やすた



めの営業でした。国道9号線をひたすらまっすぐ東に走り、自治体や商工会議所などに行つて営業をしました。気がついたら鳥取県まで行つていましたね。

——それで営業は順調にいったんですか。

石丸 いいえ、全く知ら

ない所に飛び込みで行くわけですから、向こうとしてはどの誰ともわからないヤツが来たのに、はいそうですか、ではお願ひします、というわけにはいきませんよね。しかも花火つて形がある商品ではないから、プレゼンには非常に苦労しました。一生懸命に考えて書いた資料を見せても、それだけではわかつてもらえない。うちが上げる花火の写真を見せれば良いのでしょ

うが、花火の現場というのは広さや周りの環境、制約などがそれぞれ違うので、写真を見せてそれと同じものを打ち上げられるものではない。でも、うちの花火には絶対に自信がありましたから、それまで営業をしたことのない僕が、ない知恵を絞つてひたすら頑張りました。

——自信と熱意で頑張られたわけですね。

石丸 そうです。とにかくうちの花火を見て欲しい、気に入らなかつたらお金はいりません、と言つて(笑)。じゃあ試しにやつてみる、と言われていざ当日に花火を打ち上げたら、主催者の方に握手を求められて「素晴らしい。感動しました」と言つていただけ。嬉しかったですね。もちろんお代はちゃんといただきました(笑)。

そうやつて時間をかけて一つずつ現場を増やしていきました。あの頃は並行して福岡で修業しながらだったので、休みの日には営業に回り平日は福岡に戻つて、という生活でした。きつかったですね。

辛い思い出

——福岡で修業、ですか。

石丸 親父の知り合いの同業者に預けられて、12年間そこで修業させてもらいました。厳しい会長でしたが優しい面もあつて、営業に行く時や、鎌田煙火の現場に手伝いに行く時は、快く送り出してくれました。会長はアメとムチでしたがアメが一つだったらムチが10個くらい(笑)。

—その福岡での修業を終えて鎌田煙火に帰ってきて、工場を建てられたんですね。

石丸 工場は元々は天神山の裏側にあったのですが、大雨で流れてしまったので平成18年に今の山口市徳地に建てました。要塞のような工場ですよ。毎日警察が見回りにきますし、何かあれば契約している警備会社と警察がすぐに来るようになっていきます。一般の人は入ることができません。

—お父様がその頃亡くなられたとか。

石丸 はい。僕はその時現場にいて手が離せないもので、手伝いに来ていた弟をすぐに帰らせました。僕は親父の死に目にも会えず、葬式にも出席できなくて。

—それは辛かったですね。

石丸 辛い経験でしたが仕事だから仕方がないことだし、親父もそれはわかってくれていたと思います。亡くなる際には僕の名前を呼んでいたそうです。

どうしたら喜んでいただけけるか

—今の花火はコンピュータ制御で打ち上げるのだそうですね。

石丸 親父の代までは直接点火が主流でしたが、点火する際に花火が暴発する死傷事故が多かったので経済産業省からの通達で、全国的にコンピュータ制御に変わってきました。僕が継いだ時がちょうどその過渡期でした。慣れないコンピュータに四苦八苦しながら、しかもアメリカ製の高い機器を購入して、仕事が終わって毎晩勉強しました。今ではコンピュータ制御と直接点火と組み合わせせて打ち上げています。その構成を考えるのに、また頭を悩ませます。

—構成とは何ですか。

石丸 花火のプログラムです。花火というものはただ上げれば良い、というものではありません。組み合わせで、花火の演出は全く違うものになりますからね。同じような組み合わせにしてしまうと変化のない平凡な演出に

なるし、多くの違う種類のものを配置や高低差にも考慮した構成にする
と、メリハリがきて感動的な花火になります。

頭の中で、どうしたら観客に喜んでいただけるかと、夜空に打ち上げたシーンを思い浮かべながら、構成を考えていきます。約一ヶ月前から考え始めますね。

原動力は想い

—花火大会前日の準備も見学させていただきましたが、炎天下での作業は本当に重労働だなと思いました。一ヶ月前から構成を考える頭脳労働と、体力勝負の重労働を続けていくのは大変でしょうが、その原動力はどこからきていますか。

石丸 「想いに報いる」ことですかね。どこの花火大会の現場でも、主催者さんたちは一年間かけて準備をしているわけです。一つのイベントを開催するというのはたくさんさんの苦勞があり、一つ一つクリアしていかなければならない。そしてやっとその日を迎えることができる。だからその方たちの苦勞や想いに報いたい、素晴らしいと思っていただけの花火を上げたい、その一心です。イベント成功のために、少しでも手助けをしたいと思っています。そして観客の方に喜んでいただけ、夢や希望や活力を与えることができます。

きたら最高ですね。そのためには、どの現場でも毎年違う趣向の花火を打ち上げることを心がけています。そういう自分の想いだけで続けています。

—石丸さんにとって花火の魅力は何ですか。

石丸 花火の準備には目に見え





ない多くの苦労があるのに、打ち上げる時は一瞬で美しく散ってしまふ。その美しさ、儚さですかね。

こどもの日のプレゼント

——昨年が五月五日のこどもの日の夜には、山口県立防府総合医療センターに入院している子どもたちのために花火を打ち上げているそうですが、**石丸** 僕は子どもが好きなんですよ。何年前かに鳥取県での現場が終わって片付けていると、近くの病院に入院している小学一年生くらいの女の子が母さんと一緒に暗い中をやってきて「ありがとう。いい花火でした」と言ってくれました。その言葉に不覚にも涙が出ましたね。

そのことがあつてから、病氣の子どもたちを元気づけるためにできるこ

とをしたいと思ひ、まあ、僕ができることといったら花火しかないわけで。そして準備を進めてやつと去年一回目の花火打ち上げをすることができました。これもまた、たった五分間の花火のために、消防署を初めとして、許認可申請がたくさん必要になります。現場となる医療センター近くの佐佐川土手は高速道路の下だから、その許可も取らなくちゃいけないし。一人であちこち走り回って、やつと実現することができました。

——そして今年は二回目の開催をされたわけですが、全てボランティアですかね。

石丸 そうです。「ふるさと想い出花火大会」実行委員会の仲間たちも全て手弁当で手伝ってくれて、病氣の子どもたちを元気づけたい喜ばせたいという僕の想いに共感してくれる仲間たちの協力があるからこそできるんです。仲間には本当に感謝しています。屋上から見ている喜ぶ子どもたちの姿を思い浮かべながら、これからもライフワークとして続けていきたいと思っています。

——今後の夢は。

石丸 息子が僕の跡を継いでくれるので、彼を一人前に育てることですね。

profile

石丸 浩さん

1961年(昭和36年)5月生。
やりがいのある仕事ができることが幸せ、という石丸さんは仕事に対する自信と誇りにあふれている。常に危険と隣り合わせの仕事だから、安全には充分注意するよう、スタッフにも口やかましく言っているそう。お陰で今まで無事故でこられた。信頼関係で結ばれたスタッフと、陰で支える奥様と、石丸さん同様サラリーマンを辞めて跡を継ぐ息子さんとの「チーム石丸」は、これからも華やかな花火大会の緑の下の力持ちとして、長く、夜空を彩ってくれるだろう。

〔鎌田煙火〕

山口市徳地串宇里平2434-1
tel.0835-54-1036

まりりんの 美味しいもの日記

vol. 02

憧れの「乃が美」の生食パン

「全国美味しい食パン名品10本」に選ばれた「乃が美」の食パン。

「絶対に食べたい!」とずっと思っていたのだが、山口県には店舗がなく、お隣の小倉か広島に行かないと購入できない、しかも予約が必要だということで、なかなか行く機会がなかった。

「ああ～、乃が美の食パン♡」と恋い焦がれていたところ、なんと山口市に「乃が美」が出店したという情報が入ってきた。これは買いに行くしかない、早速車を飛ばして行ってきた。こういうことだけは行動が素早い私なのだ。

通常は1本(2斤)売りで、1斤は予約のみということだが、私が行った時は予約の1斤がキャンセルになったために、1斤を購入することができた。ラッキー!

ずしりと持ち応えのする食パン。でも、触れなば落ちんといった風情の繊細な柔らかさと、手荒に扱おうと傷ついてしまうようなふわふわとした感触。ああ、憧れの乃が美の食パン。ナイフを入れると、きめ細かな柔肌、もとい生地が姿を現す。

焼かずに生で食べるのが一番美味しいそうなので、そのまま食べてみると心地よい弾力とうまみが口中に広がり、かみしめるほどに生地的美味しさが際立つ。

これだけでメインディッシュになる一枚。余計なものをつけたり塗ったりしないで、シンプルに生地的美味しさを味わいたい。何も足さない、何も引かない。

1斤432円、1本(2斤)864円と少々お高いが、たまにはこんな贅沢もよしとしよう。





vol. 01

もとの すみ い な り じ ん じ ゃ
「元乃隅稻成神社と虹」



日本の最も美しい場所31選にも選ばれた、山口縣長門市にある、元乃隅稻成神社。

休みの日、
いつものようにカメラを持ち、出かけた。
油谷方面へ向かうにつれ、
雲は徐々に分厚く暗くなり、
バラバラと雨も降りだしてきた。
しかし、空に浮かぶ厚い雲からは、
うっすらと太陽の光も漏れており、
もしかすると虹が出るかもしれないという
若干の期待に胸が躍る。

そして神社に着くと、灰色の曇天の下、
123基の朱色の鳥居が
100m以上にわたって並ぶ先に、
124基目の虹色の鳥居が
日本海より現れていた。

まるで私のために現れたような虹。
こんなにラッキーな光景を
見ることができた私は、
まだ始まったばかりの2016年の運を
使い果たしたような気になった。

2016年1月撮影

葉子谷 梨沙 Lisa Kashitani

山口県内の結婚式場でウエディングを専門にフォトグラファーとして約9年間勤め、
2013年に写真撮影のため渡豪。
その後、約3ヶ月かけて車でオーストラリア国内の風景を撮影して回る。
2015年までオーストラリアに住む日本人向けの雑誌社で、編集、フォトグラファーとして1年働く。
現在は、山口県でフリーランスのフォトグラファーとして活動中。

やまぐち「いよこびと」

山口逸彩人

人は誰でも「きらり」と光るものを持っています。

その「きらり」を発揮することによって

人は異彩を放ち、逸材となり、輝きを増していきます。

そのような意味を込めて

タイトルを「逸彩人」と名付けました。

山口の多くの「逸彩人」の

「きらり」を切り取って、

これからも皆様にお届けしていきます。